春岡村の伝説

：春岡村に伝わる物語四：

さて、今回も春岡の郷土史を編んだ銭場佐一郎さん（明治三十四年生まれ）が聞いた、春岡村の人たちがきつねに化かされたお話（実話？）です。

●きつねのはなし　その二

筆者（銭場佐一郎）の祖父市蔵は、ムコに来て間もない頃、大谷村（旧大宮市）の実家に帰り、土産に牡丹餅を作っていただき、それを持って帰る途中、現在の七里の踏切の北の薄暗いところにさしかかったころ、ボーっとなってしまい、それから二～三日、どこをどう歩いたか分からないが、気がついた時には土産の牡丹餅は一つもなく、ぼんやりして養家に帰ったことがあるという。

大正十二年の一月だったが、八木橋香秋さんの弟須蔵さんは三角平吉さんと、見沼代用水の西側（俗にトウカン台といっている）の山林へ朝早く出かけて猟をしていました。ところが、いつの間にか頭がへんになり、二人ともボーっとして判断がつかなくなってしまいました。そこで、腰に持っていた煙草に火をつけ、一、二服吸ったところで頭がハッキリしてきたので、また銃を持って獲物を探しました。すると、かなり歳をとったきつねがいたので捕まえました。結局、このきつねに化かされてボーっとなったのだろう、と後刻平吉さんは言っていました。

『農業図絵』（土屋又三郎・絵　享保二年）より

「麦、菜種田段々中打して草取」

…ムギ、ナタネを刈り取ったあとの田んぼで順序よく中耕や草取りを行う、という意。絵では中耕に平鍬を使ってイネの株間を打ち起こし、草取りは株のまわりを手でかき回しながら草を取っています。マツの木の根元にキツネが二匹たわむれています。

平山 由喜

出典…『思い出の春岡』銭場佐一郎（春野図書館蔵）

明治三十四年生まれ。教職の後、村の助役、村会議員を歴任。学生時代に春岡村の郷土史を編むことを志し昭和四十三年に完成。